

JA1AMHの高田氏が「9R59とTX88A物語」の本を出版されました、高田氏はミズホ通信の代表者である事は、各局もご承知と思います。

私が三十数年ほど目前に町田市からQRVしていた頃に、高田氏はミズホ通信を創立して、グラスファイバーの中にワイヤーを入れて製造した144mhzの5/8λモービルホイップを製造/販売していた頃に知り合いました、その後ミズホ通信の工場へ遊びに行つては修理アルバイトなどをさせて頂いたりして、好意にして頂きました。

その高田氏が出版した「9R59とTX88A物語」をCQ誌の出版紹介で見た途端に読みたくなりましたが、一般の書店では扱って無いと思い、秋葉原まで行かなくては買えないと思っていました。

しかし会社の帰りにふと本の事を思いだして、小作にある本屋さんに立ち寄ると、な、な、なんと本がありました。

そして表紙には、あの9R59とTX88AとSP5の写真と「わが青春の高一中+807シングル」の副題が書いてありました。

そしてページを捲ると大変綺麗な9R59の正面・背面・ケースを外した上面・下面の写真がありました、もうこれは買うしかありません、即レジへ直行しました。

JR青梅線に乗ると早速、本を開きました、1ページから16ページまで9R59・TX88A・SP5・VFO-1・CC-6・CC-2やコイルパックKR-430やIFT、さらには真空管の807・2E26をはじめ9R59・TX88Aに使用されている真空管の写真が綺麗に写っていました。

ナツメロを聞くと、その当時にタイムスリップする感覚と同じ様に、9R59やTX88Aの写真を見た瞬間、私は丸刈り頭のラジオ少年になっていました。

JR青梅線の小作から西武線の武蔵砂川までは乗り換えを含めて30分位ですが、夢中で本を眺めている内にすぐ武蔵砂川に到着してしまった様な感じでした。

私が無線に興味を持ち始めた高校一年当時の日本で標準的なリグであったのが、9R59とTX-88Aでした、しかしこれらのリグを自分の購入にする事は出来ませんでした、高校生の身分で完成品が33,000円、キットですら18,500円の9R59は高嶺の花でした。

昭和38~9年当時はST管の5球スーパーラジオがゴミとして出されている事があり、壊れたBC対帯の5球スーパーから部品を取り出しては短波ラジオ

に改造して、7Mや3.5Mを聞いていました。

そして、ST管の5球スーパーには満足出来ずに、キットの9R59を仕入れるべく、アルバイトと小遣いを貯めて購入しようと思い頑張りました。

12,000円貯まった所で、友人に相談した所、秋葉原へ行って粘れば9R59のキットなら買えると云う事になり、二人で意気込んで出かけましたが、18,500の4割引きに相当する11,000円台の値引き交渉は失敗に終わり、店のオジサンの薦めで9R59のジュニア版として発売中のJR200を購入する事になりました。

この本に因ると9R59は昭和36年から発売を開始して昭和39年頃からはJR60に移行の時期であった様でJR200もこの時期に発売開始していません。

JR200は高一中一でQマルチは無く14,500円でたしか11,000円で購入したので定価の2割引でした、9R59の2割引きは14,800円ですから、あと3ヶ月くらいバイトや小遣い節約で購入出来たのにと、今は思いますが当時は1日でも早くメーカー製のRIGがほしかったのだらうと思います。

JR200持ち帰り完成品であれば早速電源を入れてみる、となるのですが、あいにくキットなので自分で配線をしなければただの箱です。

学校から帰ると直ぐに半田ごてに火を入れて、電源周りの配線から始め、抵抗やコンデンサーの半田付け開始してから、3日位で完成したと思います。

キットに真空管は付属して無いので真空管は別に用意する必要がありました。少しは手持ちの真空管も在りましたが足りない球もあり、新品は買えないので杉原商会(現・杉原電子)へ行ってはジャンクをあさり安い真空管を購入した。当時の杉原商会は現在の立川市砂川町ではなく、立川の南口から国立方面へ歩いて15分位の所にありました、床は無く地面に屋根と囲いがある、物置みたいな所に米軍放出のジャンクが雑然と棚に置いてありました。

そしていよいよJR200の電源が入り音が聞こえてた時の喜びは今も忘れません。

そして、夜になってパイロットランプの光に映しだされた横行ダイヤルの周波数標示文字がとても綺麗で今もハッキリ覚えています。

後に幾つもの無線機と出会いますが、9R59やJR60、我がJR200の夜間照明に映しだされた横行ダイヤルの周波数標示の美しさは一番です。

BC779やJRCの業務用受信機を使用した事がりますが、いかにも通信機らしくてカッコいいけれど美しさが無かったです。

JR200で本格的にHFのSWLを始めると、1エリアは勿論日本全国の

アマチュア局が聞こえてきました、ANTは当時一番入手し易い300オームのTVフィーダーで7M用のフォールデットダイポールを竹竿のポールに設置しました。

そしてSWLカードを発行して、QSLカードが届いた時は興奮しました、返信用封筒も付けずに、自作の汚いSWLでQSLカードを送って頂いた局には頭が下がります。

JR200は高一中一のシングルスーパーで9R59にあったQマルチは無しですが、それなりに満足して使っていましたが、やはり高一中二仕様に改造する事にしました。

9R59の特徴であるQマルチは、当時出始めていたSSBの復調には良く混信に有効であるとの認識はありましたが、SSB局はまだ少なくてBFOでの復調出来るし、混信の中から目的の変調信号を聞くのは自分の耳を訓練すれば良いと考えていたので、Qマルチの増設は無しでした。

JR200の1mmの鉄板シャ-シにIF一段を増幅する為にIFTとMT管の穴を開けるのですが、当然電気ドリルなどは無く、ハンドパワーのドリルでゴリゴリ開けました、そしてリーマーとシャーシパンチで穴を大きくしてヤスリで削り仕上げました。

更に9R59仕様にする為に、前面パネルにあるAVC-MVC-SWやANL-SWをスライドSWからスナップSWに変更したり、IF-GAINやANTトリマーを取り付ける為に前面パネルもハンドパワーのドリルでゴリゴリしました。

そしてQマルチ無しで高一中二の9R59仕様に改造しましたが、耳で聞いた感じでは改造前と格段の改善は感じませんでした、開局後のリグ紹介の時に「受信機はJR200を改造した高一中二です。」を言いたかったのだろう。

TX-88Aには全く入手は困難なので、学校にあったTX-88Aを夏休みに借用してJR200と並べてみたら、さすがトリオの製品ですね高さはピッタリでとても、FBでしたので記念写真を撮りましたが白黒写真で部屋も暗かったためイマイチでした。

開局時の送信機は自作で、終段は2E26S変調器は6L6PPをリードのAS-2のケースに収めました、電源トランスはアルミのシャーシに裸の状態で見付けました。

1966年3月、JA1WOB開局当時の無線設備は受信器 JR200改造 (高一中二)+ クリコン 43M->7M送信器 終段は2E26S変調器は6L6PP 電源部 送信器

開局当時の無線設備の写真をご覧になりたい方は、白黒写真ですが
URL <http://www.geocities.jp/jalwob/old1.htm> でご覧ください。

J R 2 0 0 を改造して高一中二にはなりましたが、9 R 5 9 や J R 6 0 のダイヤル付いたフライオイル機構が無いため、メインダイヤルやスプレットダイヤルを操作した時重圧感が無く、学校や知合いの局で9 R 5 9 を操作する時は、ダイヤルの重圧感を楽しんでいました。

後になって使用した、B C - 7 7 9 や T S - 5 1 1 や **FT-101** などに様にギヤダイヤルの感覚も F B ですが、私は9 R 5 9 の糸掛け方式のダイヤルにフライオイルを付けた横行ダイヤルが今でも好きです。

9 R 5 9 の後続機9 R 5 9 Dは横行ダイヤルが無くなり、同調は大型の2重ツマミとなり通信機らしくなったが、私の好みのデザインでは無くなりました。ハムフェアやハムショップなどで、9 R 5 9 を見掛けると今でも欲しくなります、正に我が「青春の9 R 5 9」です。

そして、J R 2 0 0 を現有している局もあり羨ましく思います。

真空管の高一中二受信機コレクション URL

<http://members.jcom.home.ne.jp/0355667201/>

おわり